

文壇資料

城下町金澤

磯村英樹

講談社

文壇資料

澤金町下城

磯村英樹

講談社

著者略歴

磯村英樹 (いそむらひでき)

1922年(大正11)東京に生まる。

山口県立下松工業学校応用化学科卒。1963年

(昭和38), 第5詩集『したたる太陽』に第

3回室生犀星詩人賞を受賞。以後室生家に出

入りし, 室生犀星研究をつづける。

日本現代詩人会理事長。

現住所 東京都世田谷区鎌田1-14-6

©1979

HIDEKI ISOMURA

第1刷 昭和54年9月15日



Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取

替え致します。

文壇資料 城下町金澤

定価 1400円

著者 磯村英樹

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京(945)1111(大代表)

郵便番号 112 振替東京8-3930

編集 株式会社 第一出版センター

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

0095-269854-2253(0) (七)

目次

はじめに 5

I 犀川の愛の詩人 7

犀星の出生 8

養父母と雨宝院 21

初恋の「女ひと」 29

裁判所の少年俳人 40

「海の乳」したたる金石 50

若き日のライバル 57

II 浅野川のほとりから 65

鏡花の女人像 66

徳田秋声と「町の踊り場」

尾山篤二郎と樫田文 109

Ⅲ 兼六園 129

表棹影と茶屋の娘おたま 130

萩原朔太郎と村田艶 134

芥川龍之介と芸妓しやつぽ 140

島田清次郎と芸者小菊 145

五木寛之のドラマ 171

Ⅳ 四高生と兵隊 183

「歌のわかれ」と中野重治 184

窪川鶴次郎と石川屋 202

森山啓とみよ夫人 207

多田不二と犀星 214

井上靖と柔道 217

第九師団第七聯隊と鶴彬 230

V 雪恋い 241

加賀子守唄と永瀬清子 242

サーカスと中原中也 262

「雪かとおもふ」水芦光子 273

「城下町金沢」文学年表 306

主要参考資料 311

装幀・森下年昭

口絵撮影・講談社写真部

吉岡寛

はじめに

加賀前田藩の文化政策は、上方の名工、職人を呼び集め、職人王国を作り、江戸上方の芸能人を呼んで芸能的雰囲気成熟した。加賀はまた奥の細道の途次、芭蕉を十日間滞在させる俳句王国でもあった。

明治維新により、怒濤のように押し寄せた近代の潮流は、その肥沃な風土を刺激して、文学の萌芽を促した。泉鏡花、徳田秋声、室生犀星ら、互いに異質の個性をもった文豪が輩出した。近代の風潮を敏感に反映して、流星のように輝き燃え尽きた島田清次郎を生み、刻苦して生涯を積み上げた狷介の歌人尾山篤二郎を生んだ。

幕府の外様藩への差別政策に次ぐ明治維新の日本海差別政策は、加賀に反体制の精神を^{はぐく}育んだ。軍国主義の出城の兵営に正面から体当りした川柳作家鶴^{やま}彬を生み、北陸各地から第四高等中学校に集まった中野重治、窪川鶴次郎、森山啓らのプロレタリア作家を育てた。

滞郷の室生犀星を訪ねて、萩原朔太郎、芥川龍之介、堀辰雄らが来沢し、四高生、中野、窪川、多田不二らもその家を訪ねた。犀星は中野、窪川、堀らの文学運動の無言の後楯となった。

父の赴任のために金沢に住んだ永瀬清子、中原中也、井上靖らは、それぞれ自己形成に深い影響

を受け、独得の文学を確立した。犀星最初の女弟子、金沢生れの水芦^{みずあし}光子は、金沢と大阪を往復して、第二次大戦突入前の陰鬱な空気の中の野間宏、富士正晴、伊東静雄らにひたぶるな北国の雪の匂いを運んで新鮮に刺激した。戦争末期、金沢に疎開して、県立第二高女の永瀬、水芦の後輩となった曾野綾子も、その疎開体験を文学に反映させた。

I

犀川の愛の詩人

犀星の出生

古都金沢の町を貫いて二本の川が光り流れている。犀川と浅野川である。

犀川のはとりには室生犀星が生れ、浅野川のはとりには、泉鏡花、徳田秋声が生れた。

二つの川のうち、殊に犀川の印象が強いのは、犀星がその詩にくりかえしうたい、その小説の舞台としてくりかえし選んだからであらう。

犀星は犀川のはとりに生れたので「生」を同音の「星」にかえてペンネームとした。犀川の犀も同音の漢字をのちに当てたもので、熱帯に棲む動物の犀とは関係ない。

古語では百合のことを佐章（さい）と呼んだらしい（「天馬と白鳥」三浦昇、「東京新聞」昭52・4・14）から、古代語の「さいがわ」を現代語訳すれば「百合川」で、古代においては、この川の兩岸に百合の花が咲きみだれていたのだらう。

犀川の河口の町金石かねいしで生れた犀星の生母千賀も、河原で遊んだ幼い女友だちも、河畔の寺雨宝院で共に養母に育てられ、芸妓に売られていった義姉おていも、犀星が下宿した金石の尼寺の若い尼たちも、童貞を捧げるときにも雪の日の犀川大橋を傘を傾けて渡るときにも母を感じた西の廊の娼婦も、思いがけなく大きい太股のあたりまで着物の裾をたくし上げて犀川の深みで養母に洗濯物

をすがされた「花を見るように清潔な」義兄の若妻も、桜橋に近い犀川の堤ではじめての嬉あひびき曳ひきに「あなたの許もとにまいります」とはつきり言った妻のとみ子も、百合のように肌の白い加賀の「女ひと」で、それらは犀星の文学の川のほとりに咲きみだれ匂いやまない花々であった。

犀 川

うつくしき川は流れたり
そのほとりに我は住みぬ

春は春、なつはなつの

花つける堤に坐りて

こまやけき本のなさけと愛とを知りぬ

いまもその川のながれ

美しき微風とともに

蒼き波たたへたり

犀川の流れは美しいが、犀星の出生も生い立ちも川のように美しくなかった。犀星はその出生の秘密を一生背負いながら、それを「正」のエネルギーに変え、独得の文学を打ち樹てた。

犀星は明治二十二年八月一日、犀川に近い金沢市裏千日町三十一番地に生れた。父は小島弥左衛



室生犀星

門吉種といい、旧加賀藩で百五十石の禄を食む足輕組頭であった。吉種は神明流の使い手で、藩の武学校経武館へ出講し、剣術のほか弓術、槍術、馬術等武芸百般を教えていた。

『加賀藩諸士系譜』（津田信成編）によれば、吉種の父弥五郎久種は「天保十一年五月能州山奉行」と記載され、そ

の祖父弥六は「始算用者、后小頭、新知行八十石、天明五年九月加増廿石、合計百石、組外御勝手方御用」とある。若死した父仲右衛門を飛ばして孫の弥五郎がこの弥六を継いでいる。

吉種の孫敏種（詩人）と交流のあった山本昭子は、敏種から「腕の立つ吉種は藩の首斬り役人も兼ね、遺族の復讐を怖れて屋敷から神明宮へ通ずる抜け穴を作っていた。戦後調べてみたら穴は二、三メートルで行き止りであった。」という話をきいているが、確証はない。『杏つ子』に「死刑執行人」という項目があるが、ここでは首斬り本間左門は養母ハツの昔の飲み友達である。吉種首斬

役人説は家系にこだわる風土に厭気がさしての敏種（フィクション）だったかもしれない。

吉種は明治二十年妻まさを失ったとき六十二歳であったが、二尺五寸以上の刀を使ったというこの長身で屈強な体軀の持主は、精力も旺盛で、妻の没後、身のまわりの世話をしていた小間使の山崎千賀（女中名ハル）に手をつけ、犀星を孕ませたのである。

当時、長男生種は新妻を伴って富山県の小学校に赴任し、長女梅は嫁いで七尾に住み、同じ屋根の下の男女二人きりの暮しが続いていたのだから、止むを得ないなりゆきであったともいえる。

千賀は明治元年生れだから、吉種の妻が亡くなった年に小島家へ来たとすれば二十歳であった。戸籍の地名から判断して、小島家へ来る前、千賀は富山県の高岡で芸妓であった可能性が強い。二十歳になったばかりでも、すでにゆきずりの男たちの寂寥を慰める「汚濁の聖女」の哀しい習性を身につけた女が、悩ましい初夏の宵、吉種の晩酌の相手をする幾夜目かに、酒を注ぐとする白い腕をとらえて引き寄せられたとき、それを拒むことはできなかったであろう。

犀星と甥の小島第一との間にはたくさんの手紙が往復している。第一は犀星の異母兄生種の長男で、犀星より一つ年上であったが、詩を書いていたため、犀星とは単なる親戚づき合い以上に親しかった。犀星は、第一（ペンネーム貞一）の第一詩集『初餐四十四』には萩原朔太郎の序文をもらってやり、自ら跋文を書いている。『びわの花穂に／＼にわか曇りの雪風は立ち／葎にすがりしまま／蝶は凍てたり。』（「雪風」というような、季節感が強く自然観照の深い作品を編んだ無欲のさわやかさをもった詩集である。

その第一との往復書簡には、犀星が依頼した生母の調査結果が書かれていた筈だが、犀星の意志で両家に残さぬようすべて焼きすてられていた。ただ犀星の死後、赤皮の手文庫の奥深く、一通のはがきだけが大切にしまわれているのが見つかった。

それは昭和四年三月一日付の金沢局消印のある第一が犀星の問いに答えて実父について報せた手紙で、明治二十四年の吉種の日記に基づき、吉種は「文政九年正月於加賀国出生、同年六十六歳。」家族は「当年生種二十九歳。珠二十一歳。第一四歳、菊見二歳」「貴兄の母は山崎千賀とあるのが、そう、いい。」と書かれてあった。(傍点筆者)

吉種の系累に山崎千賀という女性が存在しない。並の女中の名をフルネームで家族と並べて日記に記入する筈はなく、この女性こそは犀星を生んだ母であることに疑いはなかった。

千賀は明治元年六月十三日、石川県石川郡金石町かみいしに、父林宇兵衛、母たよの長女として生れた。吉種の日記では千賀だが戸籍名は「ちか」である。したがって以下ちかと呼ぶことにしよう。

ちかは明治二十年、二十歳のとき、富山県射水郡高岡町宮脇町、山崎忠四郎の養女となつてゐる。吉種の妻まさの死んだ年である。

すこしややこしいので系図に書いてみよう。

ちかが犀星を身籠ったとき、吉種は悔みはしなかった。むしろ、ちかの頭のよさ、家事の切りまわしの要領のよさ、武家の躰にも適合できる行儀のよさを愛し、許されれば後妻に迎えたいとまでおもっていたにちがいない。

かに生れて来る子の引取りを頼みこんだ。

明治二十二年八月一日、暑い夏の真っ盛りの日に男の子が誕生した。お湯を沸かし、なれない無骨な手で赤ん坊をとりあげた吉種は、水をかぶったように着物までぐっしょり汗に濡れた。

「刀を使うよりもへその緒を切る方がよっぽどむずかしいわい。」

と吉種は額の汗の雫を拭いながら思った。

私が一等イヤな思ひを持つてゐるのは、その時の私が生後何ヶ月も経たなかつた赤ん坊であつたことと、そのおへそには血がにじんでゐたといふ二つの事件が頭からんでゐることである。おへそに血がにじんでゐることは、その赤ん坊がぎあぎあ泣きすぎることに、へその緒がうまく切れなかつたことに原因するらしい。それは私の姉から聴いた話であつて、それ以来私は私の子供達がうまれた時にも、へその安泰を先づ眼にいれた。かれらのへそには、不倖がなかつた。

だから私のおへそは俗にいふ出べそであつた。『私の履歴書』

犀星は、吉種の無骨な手でへその緒を引きちぎられると次にはけんめいに吸いつく乳房から引き離されて、夜陰にまぎれて養母赤井ハツの手に抱きとられた。

赤ん坊は彼にとっていちばん大事な乳房が残酷に奪われると一種の神経症を起す。母の乳房への激しいノスタルジーが保存されて成長すると、飲酒や喫煙に対する強い誘因となる。しゃぶりコン